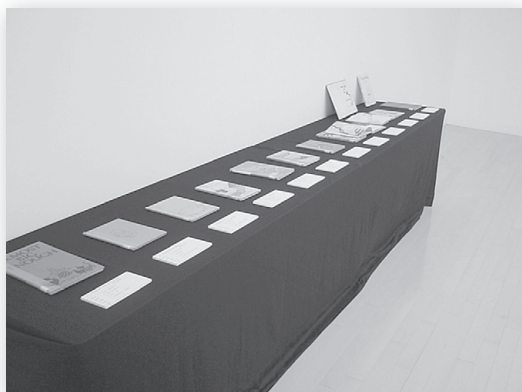


# 琉米文化会館の子どもの本（沖縄県立図書館所蔵） から考える図書館のあり方

山口 真也



[ 展示会の様子 ]



[ ギャラリートークの様子 ]

## ■ はじめに

2010年9月1日(水)～9月4(土)にかけて、那覇市おもろまちにある沖縄県立博物館・美術館の「県民ギャラリー3」にて、「沖縄地域児童文庫連絡協議会20周年記念行事」として、沖縄県立図書館に残されている琉米文化会館所蔵絵本・児童書の展示イベント「琉米文化会館の子どもの本が語るもの」が開催されました。

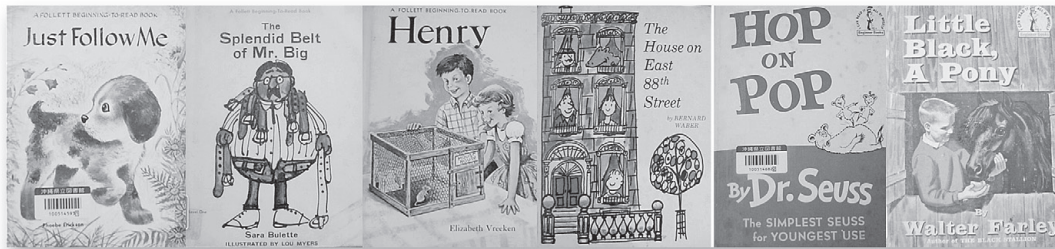
本イベントは当初は8月31日(火)からの開催予定だったのですが、あいにく台風が沖縄本島を直撃してしまったため、初日の日程が全て中止となり、9月1日からの開催となってしまいました。31日に予定されていた至学館大学准教授・斉木喜美子先生による講演会「琉米文化会館の光と影—アメリカの絵本・児童書から見えてくるもの」も中止となり、とても残念に思っていたのですが、斉木先生のご好意で、「ギャラリートーク」として、9月1日～4日までの3日間、午後2時～3時にかけて1時間ほどお話を聞くことができました。

以下、簡単にですが、当日(9月1日)のギャラリートークから印象に残った点と展示されていた絵本をご紹介します。

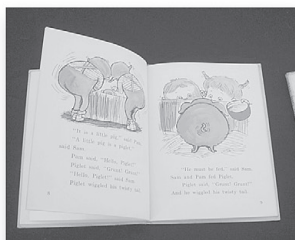
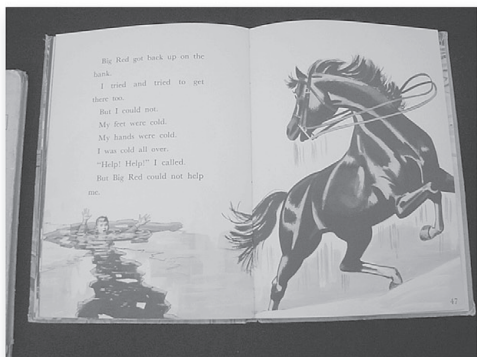
## ■ 琉米文化会館と子どもの本

琉米文化会館は、沖縄の占領期に、アメリカの民主主義思想や文化を伝えることを目的とし、政治的な意図をもって、全琉5ヵ所(名護市・石川市・那覇市・平良市・石垣市)に設置された情報センターです。

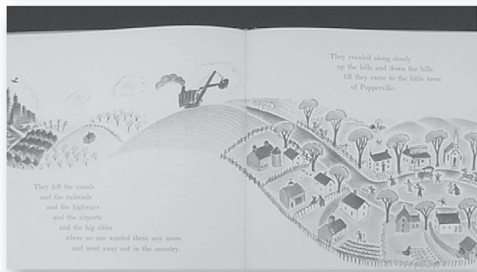
沖縄の占領下研究ではあまり考察の対象になっていませんが、琉米会館内に設置された図書室では、大人向けの資料だけでなく、子ども向けの絵本や児童書も数多く収集されていました。その一部が本土復帰後、那覇市立小祿南図書館に移管され、その後、沖縄県立図書館に移されて、現在に至っています。



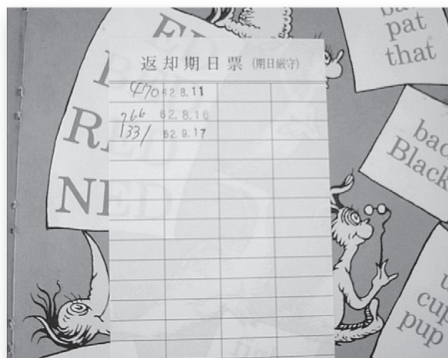
〔展示されていた絵本の一部〕



← 50年以上もまえの絵本とは思えないくらいカラフルなものが多いです。英語がわからなくても十分たのしみそうです。



→本の後ろについている「返却期限票」の記入は個人名ではなくカード番号になっていました。このあたりはさすがアメリカ型の図書館だなあと感じました。



占領下のアメリカによる文化政策については、批判的に取り上げられることがほとんどだと思います。例えば、琉球列島米軍高等弁務官府が発行していた『守礼の光』という雑誌は、県民の間では、アメリカ側の「プロパガンダ誌」と認識され、その雑誌を燃やしたり、破り捨てたりするといった抵抗運動もあったそうです。琉米文化会館内の図書室の

活動についても、アメリカ側の管理体制にありましたので今日の図書館では考えられないような様々な取り決めがあり、例えば、共産主義的なメッセージが含まれた作品を選ぶことができない、といった選書上の制約もあったというお話もありました。こうした選書のあり方は、「図書館の自由」という観点からみて大きな問題があったように感じます。

しかし、そうした問題がある一方で、1950年代、1960年代の沖縄の子どもたちが置かれていた文化環境がかなり劣悪なものだったことも事実です。例えば、当時の沖縄では、日本語の本は「輸入品扱い」となっており、子どもの絵本なども、一般の書店ではほとんど扱われていなかったそうです。そうした状況を考慮すれば、英語で書かれているとはいえ、子どもたちの身近に場所に、絵本や児童書に触れられる環境があったことはもっと評価してもよいのではないかと、——斉木先生のこうしたお話には「なるほど」と考えさせられるところがたくさんありました。

### ■ 子どもの文化と図書館政策

斉木先生はギャラリートークの最後に、2008年に起こった大阪府の国際児童文学館の閉鎖・移管問題を例に挙げて、「文化を残すのにもコストがかかる」、「貴重な文化だから残しておくというだけでは通らない世の中になってきている」、「みんながその文化の価値を認めて、残したいと思うものしか残せない時代になってきている」と問題提起されました。

皆様も御存知の通り、大阪府の国際児童文学館は橋下徹知事の財政再建政策の下で、知名度の低さや立地の不便などを理由として、大阪府立中央図書館への施設・資料移管がなされました。(現在は府立中央図書館内で再オープン)

沖縄県立図書館に残されている琉米文化会館の絵本や児童書についても、今後、もしかするとただそこに残し続けることは、市民社会の中でコンセンサスを得ることが難しくなる時代が近づいてくるかもしれません。また、展示会で絵本の数々を実際に手にとってみる

と、その芸術性の高さに驚かされる作品も多く、これらが書庫で人知れず眠り続けるだけではもったいないという気持ちにもなりました。斉木先生のお話では、これらの絵本・児童書の中には、日本国内で沖縄県立図書館にしか所蔵されていないタイトルもいくつかあるということでした。アメリカ統治時代の「負の遺産」として保管し続けるだけでなく、今回のような展示会も含めて、何かの形で、もっと積極的に県民の財産として活用できる方法はないのでしょうか。

琉米文化会館に所蔵されていた絵本・児童書は、整理を終えているものについては、現在も、沖縄県立図書館で自由に閲覧できるそうです。まだまだ存在や価値を知らない人も多いと思いますので、まずは私たち図書館関係者がそれらに触れ、広くその存在を伝えていくことが大切だと思います。

皆様も、沖縄県立図書館に行かれた際は、ぜひ一度、これらの絵本・児童書を手にとってご覧になってください。

---

やまぐち しんや：沖縄国際大学